



平成22年3月1日

創立五周年記念式典・記念講演

『ロータリーの未来』

裏千家今日庵大宗匠・裏千家前家元
R.I.2650地区京都ロータリー・クラブ
国際ロータリー日本財団会長

千 玄室 様

皆様、ご機嫌よろしゅうございます。今日は東京六本木ロータリー・クラブの創立5周年にお招きを受けまして、大変光栄なものと存じております。私も京都で、今年でちょうど55年、ロータリーに在籍をさせていただいておりますけれども、いまだにロータリーって一体何だろうと悩み続けております。若いころにはどうしてロータリーなんか入ったんだろうと。しかし、週1回1時間を割いて出席して皆さん方とお目にかかって、その職業をお互いに理解し合う。その理解し合うというところから実は職業奉仕と、集団の職業奉仕の二つの意味が出てくるわけです。

私は毎年エバンストンへまいります。エバンストンでいろいろミーティングがあるんですが、この7月から会長になるアメリカ出身のクリンイン・スミスが私ども経験者を集めて、自分の年度のいろいろな諮問をしたわけです。その中で驚いたのは、彼の場合では自分の年度には今ある委員会を半分に減らしたいという。四大奉仕部門の元に細かい委員会が沢山あって世界各国から委員が招集される。その旅費も宿泊費も全部R.I.持ちなんです。だから出費が多い。そして議論するけれど、ちっともそれが実現できない。これでは駄目だということで、委員を集めるようなことは半減する、事務局もリストラする、さらに職業委員会を廃止したいということを言います。これは実は大変なことなんです。四大奉仕部門の一番大事なのは職業奉仕なんです。今から105年前にロータリーを作ったポール・ハリスの伝記を読みますと、「私はどんな場所に行ってもロータリーを代表して言えることは、ロータリーはまず寛容である」と言っています。寛容というのは、自分の職業を大切に思うと同時に他の人たちの職業も大切に思っあげなきゃいけない。ロータリーの原則は一業種一人というところの一つの大きなdignityがあるわけです。それがあまりにも今、拡張のためにいろいろ

名目が変わられて、必ずしも一業種一人にはなってない。職業分類がいかにロータリーにおいて大事かというと1923年の34という決議案があって、これが「職業分類、職業奉仕」に対して明確な哲学、指針を与えたものである。職業から生まれるいわゆる奉仕というものを、まず職場を通じて、そして地域社会に及ぶようにしていかなければならない。自分の職業を通じて社会に貢献していけるということはinvisibleな一つのサービスなんです。「We」か「I」かということかというと、スタートは「I」であったわけです。そして自分の仕事の上での悩みを共に打ち明けて共存共栄していこうというのがロータリーの「We」なんです。「I」から「We」に変わっていく。クラブにおいて自分の職業奉仕に対する理念を皆さんに訴えて、それじゃそういうことでやろうかという同志的なものが集まると今度は「We」になる。だから「I serve」と「We serve」は両立しているわけです。



クリンイン・スミスも言ってるのは、例えばその格差。5人ぐらいのロータリーもあれば100人、200人、500人、シカゴなんか800人というメンバーですからこれは大変な格差です。そういうクラブは非常に長い歴史を持って、R.I.からこうしろ、ああしろと言わなくても自主的にきちっとやっている。ところがロータリーであってロータリーでないようなところもある。そういう所が非常に多くなったので、クラブリーダーというものをつくらなきゃならない問題が出てきたんです。ロータリーの方も長い間のぬるま湯に浸かったような事務局の状態では大変なんです。事務局長とか事務総長がこうやれ、あ



あやれ言っても、局長以下の人たちが皆握っていてノーと言ったら絶対できません。私も理事会に出て、なるほどこんな仕組みじゃだめだと思いました。ロータリー財団の方にも皆さん方のクラブからいろいろ意見が出てきます。これ早く処理しなきゃと言ったら、事務員を随分臆首されて仕事ができないから事務の者をもっと入れてくれなきゃ困るといような反論が来る。そういうマンネリズムの中の今の国際ロータリーの組織は改めなきゃいかんというのがクリンイン・スミスの考え方です。しかしメンバーが誇りを持ってやっている職業奉仕をもし廃止するなら、世界のロータリーが半分ぐらいに減ってしまうだろうと、我々は反対しました。それで理事会の決議で、23の34という職業倫理についての規定は残されることになったんですが、付帯として検討課題にするというようなことで付けられてしまいました。

私は茶道という自分の職業をVocationalと考えています。決してOccupy、Occupationとかいう言葉ではない。そのVocationalというのがロータリーで使う職業なんですよ。天から与えられた職業がVocationなんです。天職なんですね。その天職というものをもって皆さん方が、世界中の人が入っているのに、その職業を無視してしまったら一体どうなりますか。もうこれはロータリー、足元から崩れてしまうんですね。さすればもうロータリーのFutureはないんです。ロータリーほど不思議なものはないんですね。公的機関でも私的機関でもない。アメリカで認定された団体であるというだけなんだけど、その団体がこれだけ世界中に広がっているのは一体どういうことか。やはりロータリーは自分自身を磨く場である。いろんな方々にお目にかかって、いろいろな含蓄を受ける、スピーチをお伺いする、自分たちができる限りの献身的な奉仕をする、そういう所に不思議な魅力があるんですね。ですからやめられない。このやめられないロータリーが、私は一番力強い一つのあり方を持っていると思います。

ロータリーに入って来る方は第一人者ばかりだと思います。ただどこそこの支社長だとか会長だとかいう肩書があっても、入り口から入ったらもうその肩書は忘れてしまわなきゃいけない。アメリカや他の国でお互いをニックネームで呼ぶというのはそこなんですよ。これが平場なんです、平なんです。私どものお茶の教えでございます一番のお茶をいただくのにも、なんであんな面倒くさいことをせんらんのか。隣の人に「お先に」、こっちに「いかがですか」。そんなもんぐっと飲めばいいじゃないかと。

でも隣どうしすすめあう。その気持ちが今世界中で欠けているんですね。ロータリーはまさしくその場なんです。私がロータリーを好きなのは、みんなとともに一体になって、手を繋ぎあって一つの目的に向かっていく。それは奉仕であります。その奉仕に自分を尽くせるところに喜びを感じる。そしていつの間にか自分が、ロータリーによって人格を洗ってもらおう。いっぱい垢をロータリーの場へ出て落とすしていく。要するに無になっていく。

中国の唐の時代に龍牙和尚という方がいます。私の修行中、師匠から教えていただいた中に、この龍牙和尚の偈があります。「木喰草衣心似月 一生無念亦涯 若人君処問有 青山緑水是我家」。もう実にすばらしい自然そのままの偈なんですね。「木食草衣」、木の実だけを食べる、草の衣を着る。これは今の我々の贅沢を戒めている。「心月に似る」。人間の分限を思いなさい。足るを知りなさい。そういう生活ができれば心は汚れなきあの月ようになっていく。そして「一生無念」です。なんにも思うものが無い。無涯です。どうのこうの言われるようなことはないんです。あんたそんな言うのやったらどこに住んでのやと言われたら、即座に私は言うでしょう、青山緑水これ我が家。いいですねえ。青い山、緑の水、全部自分の家なんです。その昔、そういうような気持ちを教えた人が居られたということは、もっとも地球の人々に教えていかなきゃいけない。そういう気持ちを持つロータリーこそ地球に貢献し、世界に奉仕というものの真のあり方を示して行くことができるのではないのでしょうか。

毎週の例会、そのたった1時間の例会の中でお互いに心から打ち解け、友情を得る。そして卓話の方々のお話を聞いて自分のものにしていく。入ってきた時、学ぼうという気持ち、そして出ていく時には、ああロータリーに出られてよかったなという気持ちを持ってのようなロータリーにならなきゃならないと私は思います。そして自分自身がロータリーで磨きをかけられていくんだという大きな誇りを是非持っていていただきまして、このクラブが次の10年、15年、さらには100年をお迎えになり、100年後のメンバーが今日の皆さん方のことを思って、ああ5年の時にこういうことがあったのかと、それがロータリーの大きな未来に続く一つの足跡ではないかと思うのでございます。

ご静聴ありがとうございました。